

まえがき

小川公代

新型コロナウイルス感染症が大流行していた最中、ヴァージニア・ウルフの小説『ダロウェイ夫人』が驚くほどの反響になっていた。「ミセス・ダロウェイは、お花はわたしが買ってくるわ、と言った」という有名な小説冒頭の言葉が、X（旧 Twitter）で話題を呼んでいたのだ。

世界中でパンデミックが広がるとき、どんな国や地域に住んでいても、老いも若きも、そして性別やセクシユアリティに関係なく、みな等しく隔離の状況に追い込まれてしまう。数年前のコロナ禍では、SNSで誰かが「ミセス・ダロウェイは、お花はわたしが買ってくるわ、と言った」をもじって「ダロウェイ夫人は、自分でドアノブを除菌すると言った」と投稿していた。また別の人は「ダロウェイ夫人は、自分で消毒液を買ってくると言った」や「ダロウェイ夫人は、自分が「インフルエンザに」感染するかもしれないと言った」と投稿していた（Evan Kindley, 'Why Anxious Readers Under Quarantine Turn to "Mrs. Dalloway"', *The New Yorker*, April 10, 2020）。

感染症が広がっていた時期に、なぜこれほどまでにウルフの言葉が引用されるのだろう。『ダロウェイ夫

人』の舞台設定は一九二三年。パンデミックが広く影響を及ぼしていた時期でもある。二〇一九年に刊行されたエリザベス・アウトカの『ウィルスのモダニズム』という本の副題は「インフルエンザ・パンデミックと戦間期文学」なのだが、まるまる一章が『ダロウエイ夫人』の考察に充てられている (Elizabeth Outka, *Viral Modernism: The Influenza Pandemic and Interwar Literature*, Columbia UP, 2020)。主人公クラリッサが死を意識しながら感じていた恐怖は、おそらく彼女が罹患したスペイン風邪の恐ろしさを表現していたといえる。そしてウルフ自身も脆弱性を抱えながら、スペイン風邪を患っていた。

もちろんウルフが生きた二十世紀初頭と、二〇二〇年からの数年間では時代は異なっている。それでも、人びとが新型コロナウイルス感染症の影響下にあったことで——いまでも影響下にあることで——抱え込んでしまいう不安や葛藤は、ウルフの時代と地続きであると言える。日本でもウルフ・ブームの到来と呼べる現象が起き始めたのも、パンデミック以降だったのではないだろうか。

二〇二〇年発表の鴻巣友季子による「ウルフをめぐる静かな「ささやき」」(『群像』第七五巻第六号)をかきりに、二〇二一年には森山恵による『波』や岩崎雅之による『フラッシュ——ある犬の伝記』の新訳が出た。二〇二二年には西崎憲訳『青と緑——ヴァージニア・ウルフ短篇集』が刊行され、そして二〇二四年には鴻巣友季子訳の『灯台へ』が文庫化されている。このほかには、片山亜紀による『月曜か火曜』も邦訳されており、しかもここに記したいいくつかの例はウルフ・ブームと呼べる現象のほんの一部である。

拙著『ケアの倫理とエンパワメント』のなかでは、ウルフが苦しんだスペイン風邪についても触れつつ、彼女の「病気になるということ」(“On Being Ill”)というエッセイで用いられた「横臥者」(the recumbent)という概念に注目した(『群像』で「ケアの倫理とエンパワメント」という連載を始め、同名の本を二〇二二年に発表した)。そういう意味でも、『ダロウエイ夫人』という作品は横臥者文学の金字塔と云えるのではないだろうか。

本書に収録されている松田青子へのインタヴューでも取り上げられている『おばちゃんたちのいるところ』は、『TIME』誌が二〇二〇年の必読書百選の一作に選んだことでも話題を呼んだが、松田によれば、この作品にはウルフの影響が色濃く表れているという。もつとも最近の動向としては、二〇二四年に芥川賞を受賞した鈴木結生もウルフの『オーランドー』などの作品からインスピレーションを受けて『携帯遺産』を書いたことが挙げられる。これは、舟暮按という女性作家と、彼女と深い愛情で結ばれたウエンディというイギリス人女性の物語であり、按もまたウルフ推しである。

ウルフから多大な影響を受けた韓国人作家も多い。本書にも収録されている斎藤真理子へのインタヴューでは、ファン・ジョンウンをはじめとする様々な韓国人作家が紹介されている。二〇二四年には韓国人作家ハン・ガンがノーベル文学賞を受賞したが、『別れを告げない』や『少年が来る』など、彼女の作品には戦争とトラウマを主題とした小説が多い。ウルフが韓国で今でも愛されている理由のひとつに、戦争で傷ついた人たちの視点から物語が語られてきたことがあるだろう。それは、まさに『ダロウェイ夫人』のセプティマス・ウォレン・スミスの傷つきと接続する。戦争はすでに現実の問題であり、日本でも軍事費の増加によってリアルに感じられるようになった状況に鑑みると、戦争とトラウマは今まさに語られなければならないテーマであるように思える。

『ダロウェイ夫人』こそ、様々な暴力やその脅威にさらされ、沈黙を強いられてきた人びとの苦悩の声に耳を傾ける物語である。そしてそのケアの営為からは新しい人間像が浮かび上がることだろう。この作品は、これからますます読者層が広がっていくにちがいない。ウルフの代表作ともされる『ダロウェイ夫人』をめぐる本書が、執筆者たちのそれぞれの研究成果としてのみならず、現実社会がどう再編成されるべきかについて考え続けるためのよき素材として広く読まれることを願っている。